HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大江健三郎の研究 ： 一九八〇年代以降の小説における自作リライトの手法［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	時, 渝軒
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12828号
Issue Date	2017-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67904
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Shi_Yuxuan_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　時　　渝　軒

学位論文題名

大江健三郎の研究
――一九八〇年代以降の小説における自作リライトの手法――

・本論文の観点と方法

本論文は、作家大江健三郎の一九八〇年代以降の小説における文学的営為を、この作家特有の「自作リライト」（self-rewriting）という手法に注目して再検討したものである。自作リライトとは、単に自分の作品を推敲または改善するのではなく、全く新しい作品を作り出すために過去の自作を自在に作り換える行為である。その手法は、一つまたは複数の自作を基にして、それを引用・翻案・改作・パロディなどの多彩な仕方で組み換え、過去の作品を現在の観点に基づいて解釈し直し、あるいは新たな思想を付与し、さらに時にはそこに他の作家の先行作品をも同様に組み込むことによって別次元の作品を作り出すような、大江独自の総合的な創作理念として定義される。本論文ではこのことを理論面及び実作面の両方向から追究するために、まず自作リライトについての大江の発言と先行研究を整理し、また自作リライトの手法で書かれた大江の多数の小説を時代順に概観した。その上で本論文の研究対象の範囲を、「『芽むしり仔撃ち』裁判」を起点とする一九八〇年代以降の小説、中でも特に二〇〇〇年代以降の小説とし、そこにおける自作リライトの展開と、それに付随する様々な文学的営為の問題を詳細に検討した。すなわち全三部からなる本論文は、第一部において、「『芽むしり仔撃ち』裁判」、「茱萸の木の教え・序」などを対象として、自作リライトが小説作品と書くことにまつわる諸課題、すなわち引用の手法、小説構造論、ジャンル論などと関わることを明らかにし、第二部において、『取り替え子（チェンジリング）』、『さようなら、私の本よ！』、『水死』などの作品を取り上げ、自作リライトの特徴を完成・成熟・統合を示す「最後の小説」という概念でまとめ、さらに第三部において、『憂い顔の童子』、『臈たしアナベル・リイ　総毛立ち身まかりつ』、『晩年様式集（イン・レイト・スタイル）』の三作品における自作リライトの特徴を、反完成・反統合の「晩年の様式」の観点から考察し、書くことやカタストロフィーなどの課題が、この「晩年の様式」でいかに実現されたかを究明した。その論述の過程においては、構造論やジャンル論など通常の小説分析の方法に加えて、セクシュアリティ論、比較文学、ナショナリズム論などの多岐に亙る研究方法が援用されている。

・本論文の内容

序論において、「自作リライト」を新しい作品で過去の自作を差異化する各種の方法（引用、翻案、改作、パロディ、先行作品の受容など）を含む総合的な創作理念と定義し、自作リライトについての大江の発言と先行研究を整理した。また、自作リライトの手法で書かれた大江小説群を時代順に概観し、本論の検討対象を「『芽むしり仔撃ち』裁判」を起点とする一九八〇年代以降の小説、特に二〇〇〇年代以降の小説とし、自作リライトの変奏と、自作リライトに付随する様々な文学的営為を検討の対象に入れることを明らかにした。

この問題意識の下に、第一部では、一九八〇年代から九〇年代までの大江小説における自作リライトの特徴を解明した。第一章においては、短編「『芽むしり仔撃ち』裁判」について、報告書形式で書かれたメタフィクション（小説についての小説）としての観点からその虚構性を分析し、虚構のテクストのうちに構築された歴史的かつ神話的な村が、監禁状況としての村を描いた『芽むしり仔撃ち』をはじめとする初期の大江作品のリライトであることを論じた。村という主題の再提起は、『同時代ゲーム』への注目を再び促し、明示的な自作引用による自作リライトという方法の開陳ともなっている。第二章では、短編「茱萸の木の教え・序」を「四万年前のタチアオイ」のリライトとして論じた。序文という形式が抱える問題（その虚構性や、本文の自由読解の権利を奪うことなど）を自作リライトとの関連において検討し、二作品における思想の差異、及びその差異を根拠に構築されたそれぞれの救援思想と希望観の特質を読み解いている。

第二部では第一部の論述を受け、二〇〇〇年代の三つの作品を取り上げて、二〇〇〇年代の小説における自作リライトの一側面を明らかにした。第三章では、『取り替え子（チェンジリング）』における指示語「アレ」をめぐって、主人公・古義人と作中人物・吾良の間にまつわる、言語化できないホモセクシュアリティの問題に注目し、ホモセクシュアリティと、ホモソーシャルな社会のホモフォビア（同性愛嫌悪）との間の関連性について検討した。二〇〇〇年代の大江小説におけるホモセクシュアリティの表象は、初期・中期作品に見られる強烈な身体表象を伴う男性同性愛表象や、その背後に潜む絶対的な父の表象の更新＝リライトである。第四章では、『さようなら、私の本よ！』におけるＴ・Ｓ・エリオットの「ゲロンチョン」と『四つの四重奏曲』の受容について論じ、それが非行動型の生き方を相対化し、行動性を断念しない老人論の提出に貢献していると指摘した。このような受容のあり方は、一九八〇年代から九〇年代における大江小説における外国語の詩の受容様式を書き換え、永遠循環する現在という一九八〇年代の時間論を、確定し得ない未来という時間論にリライトしたと結論づけた。第五章では『水死』を取り上げ、漱石の『こころ』、大江の『みずから我が涙をぬぐいたまう日』と『臈たしアナベル・リイ　総毛立ち身まかりつ』の三つの先行作品に対するリライトを通じて、『こころ』の「明治の精神」を起点とする近代の精神が、国家による合理的な犯罪であるという主題を読み取っている。

第三部では、反統合・反完成という「晩年の様式」を特徴とする三つの作品に注目し、「晩年の様式」が自作リライトの手法によっていかに体現されたかを分析した。第六章では、『憂い顔の童子』を取り上げ、小説の成立と『ドン・キホーテ』、実際のシンポジウムとの関係、『取り替え子』をめぐる実際の批評と小説の生成との関連、そして過去の自作を読みなおすことから読み取った「晩年の様式」について論じた。この小説で強調されたリライトは達成・成熟を遅延化し、完成としての晩年そのものを相対化し、老いに抵抗できる永遠の生命をもたらす様式である。第七章は『臈たしアナベル・リイ　総毛立ち身まかりつ』を論じ、「新しい形式」を自作リライト（書き換え・書き直し）とメタレベルの連鎖という創作方法の観点から解釈した。第八章では『晩年様式集（イン・レイト・スタイル）』を対象として、エドワード・サイードの『晩年のスタイル』と小説の成立との関係を検証し、そこに結末や定説を拒否する終わらない「書き直し」の方法を見出し、その方法に伴う批評の回路と小説生成の問題をも検討した。『晩年様式集』が呈示する自作リライトの境地は、「私」の解体作業に「他者」の批評を導入し、解体の過程を無限に持続させることである。大江の「晩年の様式」とは、こうした自己の成熟・完成を拒み、非完成・非統合の過程を維持すること、つまり自作リライトを永遠化することによって支えられている。

結論においては、本論文の研究成果を総括し、今後の研究展望を、自作リライトの手法で書かれた一九八〇年代から一九九〇年代にかけての他の作品群に対する考察と、他の作家の作品における自作リライトの現象を研究することの二つにまとめた。